

2008年「国際機関実務体験プログラム」について

ボランティアセンターでは、(財)横浜市国際交流協会(以下、YOKEと記載)と共催で「国際機関実務体験プログラム」を行っている。本プログラムは、YOKEが横浜市内に集積する国際機関の活動を広く市民に周知する目的で市内の大学に協力を呼びかけたことがきっかけとして始まり、学生達が国際交流や協力の実務体験の場を国際機関等で体験することにより、大学で習得した知識と現場での実践の融合及びその応用、国際性豊かな資質と世界的な問題を視野に入れて活動できる人材を育成することを目的としている。

本プログラムは2005年春から開始し、4年経った現在では横浜国立大学、横浜市立大学、フェリス学院大学が加わり、YOKEと4大学合同のプログラムになっている。プログラム全体の企画・運営を行うYOKE(国際機関・大学間の調整など)、受け入れ機関である国際機関、学生を派遣する立場である大学の3者が協力して運営しているプログラムである。本稿は2008年度の報告書であるが、春期に行うプログラムが年度の境目であるため、2008年の春期と夏期に実施したものについて行う。また、プログラムは、YOKE、国際機関、大学の3者で行っているが、本稿では本学ボランティアセンターによる取り組みや本学の学生たちの様子を中心に、報告を行うこととする。

2008年春期には、国連大学高等研究所(UNU-IAS)、国連食糧農業機関(FAO)、アジア太平洋都市間協力ネットワーク(CITYNET)、横浜市国際交流協会(YOKE)の4機関に各1名の学生を、夏期には国連大学高等研究所(UNU-IAS)、国連食糧農業機関(FAO)の2機関に各1名の学生を派遣した。

プログラムには毎年多くの学生が関心をよせており、今年も平均して3倍の学生たちの応募があった。ゼミやサークルの先輩から話を聞いて興味をもったり、プログラム参加のため1年以上の準備を重ねて申し込んだ学生もいるなど、毎年問題意識の高い学生たちが応募している。参加学生の募集は、11月(春期)と5月(夏期)に行い、書類選考と個別面接を経て決定した。プログラムの流れは、次ページに【表1】としてまとめた。

ボランティアセンターでは事前指導として、2度のオリエンテーションを行った。オリエンテーション(1)では、プログラムや国際機関についての説明の後、過去のプログラム参加学生から国際機関で実務体験を進めるうえでの心構えや姿勢についての話があった。オリエンテーション(2)においては、国際機関のミッションや活動内容について、事前に各自が学んだことを発表したり、研修を通して自分が到達したい目標についてのプレゼンテーションを行った。これは研修する機関について理解を深めておくことが、各機関での活動にスムーズに入る準備となること、また自分が取り組む目標を設定するための助けとなることから行ったものである。YOKEが実施するオリエンテーションでは、プログラムに参加する学生による自己紹介、プログラムの趣旨と国際機関が学生に求めるものの説明、研修中の留意点とマナーの伝達、100時間スケジュールや研修目標の設定など、情報の共有化をはかり、研修への意

識を高めている。また、研修開始前に国際機関と学生たちが面談する機会を設定している。

100 時間にわたる国際機関での研修では、各分野最先端の活動が進められていた。例えば、YOKE が夏休みに実施した「多文化共生フィールドワーク講座」開催のため、外国籍の子どもたちが多く通う小学校との事前調整に同行したり、当日の講座運営に携わったり (08 年夏期 YOKE 研修学生)、アフリカ・サブサハラ地域の食糧増産の手段として注目されているネリカ米(New rice for Africa)の可能性と課題について、日英の資料を読みこなしレポートを作成したり (08 年春期 FAO 研修学生)、世界各国の「持続可能な開発のための教育 (EiSD)」の取り組みがまとめられている報告書のデータ集計の補助を行う (08 年夏期 UNU - IAS 研修学生) など、国際機関が取り扱う具体的な活動に携わっていた。

プログラムの最後に行われる報告会では、学生たちは活動から得た学びの成果をまとめ、YOKE、国際機関、大学担当者が同席する場で発表を行った。学生たちは、「サブサハラアフリカ地域における持続可能な農業開発」や「学生や青少年が国際交流・国際協力を深める環境づくり」などのテーマで発表を行い、その後出席者から質疑応答があった。研修終了後に、研修のテーマや目標、それをどのように学んだか、それをどう生かしていきたいかなどを学生がまとめた報告書を作成した。学生たちは国際機関の担当者から報告書の内容や研修中の様子についてコメントをもらい、YOKE、国際機関、大学に提出した。

【表1】

日程	内容
オリエンテーション(1)〔大学〕 春期 12月15日 夏期 6月28日	・プログラムや国際機関について、センターから説明。 ・実務体験をおこなう際の心構えや姿勢を伝える。 ・次回までの課題の提示。
オリエンテーション(2)〔大学〕 春期 1月12日 夏期 7月4日	・活動先となる国際機関のミッションと活動内容に関するプレゼンテーション。 ・研修目標の設定準備。
YOKEオリエンテーション〔YOKE〕 春期 1月18日 夏期 7月9日、12日	・研修学生初顔合わせ。 ・プログラムの趣旨説明と研修上の注意。 ・研修目標の設定に関するアドバイス及び100時間スケジュールの作成。 ・研修上の注意。 ・受入機関面談オリエンテーション。
国際機関での実務体験〔国際機関〕 2008年2月～3月 2008年8月～9月	活動先(春期):FAO、UNU-IAS、YOKE、CITYNET (夏期):FAO、YOKE ※15日以上、100時間
中間研修〔YOKE〕 春期 2月26日 夏期 8月29日	・国際機関、学生、大学担当者による3者面談。 ・YOKEと大学担当者の意見交換会。 ・学生による国際機関見学会
報告会〔YOKE〕 春期 3月18日 夏期 9月19日	・学生による研修成果の発表。 ・YOKEと大学担当者の合同ミーティング。
報告書〔学生〕	・報告書を作成して提出 ※YOKE、国際機関、大学に提出
プログラム総括会〔大学〕 3月27日(木) 9月24日(水)	・ボランティアセンターが作成したプログラムの評価シートの記入。 ・研修の振り返りを大学担当者、参加学生でおこなう。 ・活動経験を生かして、次の課題を明確にする。

次に、プログラムの終了後に国際機関及び参加学生からのフィードバックの結果を紹介したい。国際機関へのアンケートは YOKE が作成し国際機関にヒアリングを行っている。「学生の機関や国際協力に対する理解が深まったと思うか」という質問については今回受け入れた6 機関全てから「とてもよい」という回答があった。「学生を受け入れることで機関に何かプラスになることがあったか」という質問に

対しては6機関中5機関が「とてもあった」と回答し1機関が「普通」と回答していた。「学生の研修態度」については6機関全てが「とても良い」と評価し、報告会での発表及び報告書の内容の完成度については6機関中5機関が「とてもよく整理されていた」と回答し、1機関が「普通」と評価していた。

このように本プログラムは、国際機関からも評価されており、修了学生はフィリピンやイギリス、フランスの大学に留学したり、国際協力を専攻する大学院に進学するなど、活動を通しての学びが次のステップへと結びついている。しかし参加者が少人数に限定されてしまっているため、研修での学びの成果を他の多くの学生や社会等に還元していく方法はないかとボランティアセンターでは探っていた。このような課題へのアプローチとして、本プログラムを担当したボランティアセンターのコーディネーターが2008年春期の参加学生に働きかけを行った結果、プログラム修了学生と有志の学生が協力として6月に開催された戸塚まつり¹でブース「つながる！知る！日本と世界」を設けることとなった。当日は、研修で学んだトピックであるアフリカの食糧危機への対応、アジアの都市での公害対策、在住外国人支援など地球規模の課題について、発信していくことになった。会場では上記テーマについて展示を行い、在住外国人についてのDVD上映と意見交換会を行った。DVDは活動を行ったメンバーの一人であるシネマ研究会の学生²が、神奈川県内の外国につながる青少年が住むコミュニティやインタビューの様子を撮影したものである。当日はDVD上映の他に交流会を開催し、外国にルーツをもつ明学生が自らの経験を話したり、在住外国人の支援に取り組む明学生や高校生たちが意見を述べるなど、さまざまな視点から在住外国人支援の現状と課題について、理解を深めることができた。

戸塚まつりでのこの活動は、国際協力や在住外国人支援に関心をもつ学生たちのネットワーク形成の場になり、その後戸塚在住の外国につながる子どもたちの学習支援を行うサークル「こ・こ・ろ」³が立ち上がるという波及効果がうまれた。学生たちがプログラムに「参加する」というスタンスに留まらず、そこでの学びを他の明学生や社会に還元すべく「Action」を起こしたことにより、地元戸塚で在住外国人の支援に取り組む学生の活動が誕生することとなった。

本稿では国際機関実務体験プログラムの実施報告、参加学生たちの事後の取り組み、さらに学内外に与えたインパクトについて述べた。今後は本プログラムを共催するYOKE、協力を得ている国際機関、横浜市内にある4大学と連携しながらプログラムの充実を図るとともに、学生たちの学びの成果が社会や学生たちに広がっていくようボランティアセンターとして支援を行っていきたい。

(糸井)

¹ 大学、学生、地域の三者で創る大学祭で、「国際」「福祉」「環境」を柱とした取り組みを行っている。

² かながわボランティアセンターより、本センターに「在住外国人が住むコミュニティ及び青少年へのインタビューの様子を撮影・編集に協力する学生紹介の依頼」があり、シネマ研究会の学生を紹介した。完成したDVDは「外国につながる青少年のエンパワメント」(企画：神奈川県社会福祉協議会当事者支援推進プログラム検討委員会 発行：神奈川県 制作：明治学院大学シネマ研究会)として発行されている。

³ 「こ・こ・ろ」については、本書「明学グッズ・ボランティアファンド／学生チャレンジ賞」を参照。